

幼児教育学科の授業における器楽合奏指導の実践

－ 音楽表現力の育成を目指して －

山 岸 徹

1. はじめに

筆者は、これまで大阪キリスト教短期大学（以下、本学と記載する）における授業実践の記録として以下の観点から述べてきた。

- 1) 幼児音楽系プログラムについて¹
- 2) 歌の指導について²
- 3) 伴奏づけ指導の教材について³

本稿は、それらに続くものとして主に本学における授業での器楽合奏の指導、及び筆者自身が作成・編曲したそのための教材について述べる。

器楽合奏は音楽教育の重要な要素となる部分であり、音楽表現力を高めるための大切な手段となるものである。

2. 対象となる授業

本稿執筆時点で本学においては「合奏」というタイトルの授業は存在せず、筆者が担当する「アンサンブル（合奏・合唱）」、「作曲法基礎」、「幼児音楽Ⅰ」、「幼児音楽ⅡA・B」、「公開演奏」、「卒業研究（ゼミナール）」などの各授業において部分的に器楽合奏を行っている。ただし、これらは本学幼児教育学科の学生全員が履修する科目ではない。2019年度におけるこれらの授業の対象学年、開講時期、及び受講者数と全体の学生の中での割合は次のとおりである。

「アンサンブル（合奏・合唱）」：1学年前期開講、35名（1学年全体の、27.8%）

「幼児音楽Ⅰ」：1学年、後期、31名（同24.6%）

「作曲法基礎」：2学年、前期、4名（同4.3%）、「幼児音楽ⅡA」23名（同25.0%）

「幼児音楽ⅡB」：2学年、後期、23名（同25.0%）

「公開演奏」：2学年、後期、23名（同25.0%）

「卒業研究（ゼミナール）」：1・2学年、通年開講、54名（同24.8%）

以上の各科目のうち、「幼児音楽ⅡB」と「公開演奏」は後期の開講科目であるので記載の人数は、本稿執筆時点で確定している予定数である。なお、「幼児音楽Ⅰ」、「幼児音楽Ⅱ

A・B」、「公開演奏」、「卒業研究（ゼミナール）」は、本学独自の履修方式である「幼児音楽プログラム」（注 1）の必修科目として開講されている。「アンサンブル（合奏・合唱）」及び「作曲法基礎」は「幼児音楽プログラム」の必修科目ではなく、同プログラム以外の学生も選択することができるが、実際には同プログラム以外で履修している学生は少ない。

3. 合奏で使用する楽器

当該授業で使用する備品としての楽器は、表 1 に記載するとおりである。教室には主に幼児教育の現場で使用される楽器が備えられている。

なお、履修学生の中には中学校や高等学校の時に吹奏楽やオーケストラなどのクラブに所属していた者も多く、それらの中には個人で管弦楽器を所有している学生も含まれる。そのような学生は、本人の希望により個人所有の楽器を演奏するようにしている。

表 1：授業で使用する楽器一覧

	楽器名	台数（個数）
リード楽器	・鍵盤ハーモニカ（ヤマハ製・ピアノカ）（注）	45
	・アコーディオン（注）	2
打楽器 （鍵盤打楽器）	・グロッケンシュピール（注）	2
	・鉄琴（注）	1
	・木琴（注）	3
打楽器 （太鼓類）	・スネアドラム	2
	・バズドラム（大太鼓）	1
	・トムトム	2（大小）
その他の打楽器	・サスペンドシンバル	2
	・トーンチャイム	1セット（1オクターブ）
打楽器 （小物打楽器）	・タンバリン ・スズ ・カステネット ・トライアングル ・ウッドブロック ・アゴゴベル その他	
その他の楽器	・ピアノ ・電子ピアノ ・ユーフォニウム ・コントラバス	各1

（注）各楽器の音域

4. 教材の選択

教材となる楽曲の選択は、概ね履修学生の選択に委ねている。そのことによって、学生

のモチベーションが高められるとともに、学生たちがディスカッションしながら相応しい楽曲を探し出す力を養うことにもつながると考えている。

楽曲が決まった後は、教材の作成、編曲の作業が重要となる。器楽合奏用の楽譜は各種市販されているが、以下の理由により筆者の授業では取り扱う教材の大部分を筆者が編曲して作成している。

【教材作成（編曲）が必要な理由】

- ① 備品の楽器の種類や個数を最大限生かして、履修学生が効果的な演奏ができる楽譜が必要であること。
- ② 楽曲の難易度が学生の演奏技術にふさわしいこと。
- ③ 学生が満足感を得ることのできる演奏効果が期待できること。
- ④ フルート、クラリネット、トランペットなど、学生の個人所有の楽器が演奏に加わることを前提としているので、そもそも学年ごとに履修者が所有する楽器の種類や個数に合わせて楽譜を改作しなければならないこと。

筆者の授業においては、基本的な姿勢として、幼児教育の現場で使用する楽曲・楽譜をそのまま演奏するのではなく、履修学生を主体として楽曲・楽譜を選択している。それは、学生自身が演奏することに満足感が得られることを目指しているからであり、授業においては、履修学生が音楽をする喜びを常に感じられることを最重要課題と考えている。

5. 合奏教材作成の実際

2012 年度以降に筆者が編曲により作成した主な合奏教材の楽曲名、楽器編成は表 2 に示すとおりである。「幼児音楽系プログラム」の発足は 2013 年度であり、その前年の 2012 年度については、筆者のゼミ生によるアンサンブルで使用した楽曲を記載している。

2014 年度以降の記載は、主に「幼児音楽（系）プログラム」受講者による合奏のためのものである。年度によって受講学生数が異なるため、楽器編成も作成年度によって異なる。同じ楽曲名で複数年度に重複して掲載しているものは、各年度における受講者数や楽器編成に合わせてその都度編曲し直したもので「楽曲名」(A)、「楽曲名」(B) などとして区別している。複数に渡って掲載されている楽曲は、学生から選ばれることの多い、学生が相応わしいととらえている楽曲であると考えられる。また小編成のスタイルのものや、合唱の伴奏としての編曲などもあるが、それらのスタイルについてのアイデアもその年度の受講学生からの提案に基づいたものである。

楽譜作成にあたっては、楽譜作成ソフトウェア“finale”（注 2）を使用している。各種

表2：作成した合奏教材一覧（筆者が編曲したもの）

作成年度 楽曲名	楽器	教室の備品											個人所有の楽器							合唱	
		鍵盤 ハーモニカ	アコ デ イ オン	木 琴	鉄 琴	グ ロ ッ ケン シ ュ ビ ール	ピ ア ノ	電 子 ピ ア ノ （ キ ー ボ ー ド ）	ユ ー フ ォ ニ ウ ム	コ ン ト ラ バ ス	ト ー ン チ ャ イ ム	バ ス ド ラ ム 、 ス ネ ア ド ラ ム	サ ス ペ ン ド シ ン バ ル 、 ト ム ト ム	そ の 他 小 物 打 楽 器	フル ー ト	クラ リ ネ ット	アル ト サ ツ ク ス	トラ ン ペ ット	トロ ン ボ ー ン		ヴァ イ オリ ン
【2012年度】																					
さんぽ (A)	2声部			●	●		●	●			●		●								
アンパンマンのマーチ (A)	2声部			●	●		●	●			●		●								
【2014年度】																					
「コクリコ坂」より さよならの夏		● 2																			●
さんぽ (B)	2声部			●	●		●	●			●	●	●								
崖の上のポニョ	2声部			●			●	●					●								●
ひいらぎかざろう (A)																				3声部	
【2015年度】																					
ミッキーマウスマーチ (A)	2声部			●	●	●	●	●	●		●	●	●	●		●					
ピクニック	2声部			●	●	●	●	●	●		●	●	●	●		●					
小さな世界 (A)					●	●	●	●	●					●	2		●	●			●
ホール・ニュー・ワールド							●							●	2		●	●			●
スーパーカリフラジスティック エクスピアリドーシャス	2声部						●		●								●	●			●
山の音楽家 (A)	2						●		●				●	●	2		●	●			●
アンダーザシー	2声部				●	●	●	●	●		●	●	●	●	2		●	●			
【2016年度】																					
ミッキーマウス・マーチ (B)	2声部			●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	2		●				
さんぽ (C)	2声部			●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	2		●				
アンパンマンのマーチ (A)	2声部			●	●	●	●	●	●		●	●	●	●		●					
おどるボンボリン	2声部			●	●	●	●	●	●		●	●	●	●		●					
「バイレーツオブカリビアン」より 彼こそが海賊	2声部			●	●	●	●	●	●		●	●	●	●		●					
【2017年度】																					
Back to the Future	2声部			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	2		3		●		
山の音楽家 (B)							●		●	●	●	●	●	●	2		2		●		●
アンパンマンのマーチ (B)	2声部			●	●		●	●			●	●	●	●			●				
【2018年度】																					
きよしの夜										●											
おもちゃのチャチャチャ	2声部			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●						
クリスマスメドレー① We wish you a merry Christmas - ジングルベル・ひいらぎかざろう	2声部			2	●	●	●	●	●	●	●	●	●	2			2		●		
【2019年度】																					
クリスマスメドレー② We wish you a merry Christmas - 赤鼻のトナカイ・ジングルベル	2声部	2	2	2	●	●	●	●	●	●	●	●	●								
「くるみ割り人形」より マーチ	2声部	2	2			●	●	(●)	(●)		●			●	(●)		(●)				
ひいらぎかざろう (B)					●	●	●														
小さな世界 (B)	2声部	2	2	2	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●				

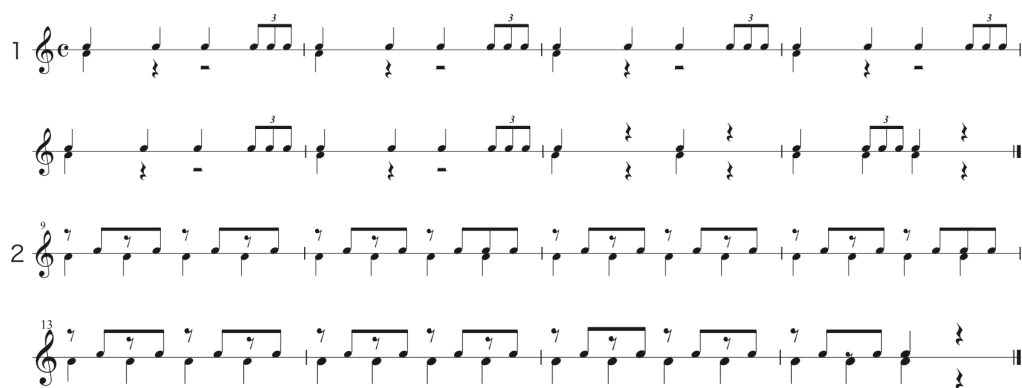
の形式の楽譜作成が可能であり、パート譜作成にも利用している。なお、これらの作成した楽譜は、すべて筆者の授業内においてのみ使用している。

幼児教育現場で使用する楽器の合奏の場合、低音楽器が少ないために低音域が不足することへの注意が必要である。当該授業においてはキーボード（電子ピアノ）によって持続性のある音色を選んで加えることにより低音を補強することを心がけた。充実した低音を出すために専用のスピーカーを接続して使用している。また、備品としてユーフォニウムとコントラバスがあり、それらを活用した。楽器の分担は、基本的に学生の希望を優先することとなるが、これらの楽器は毎年希望者が存在した。コントラバスについては、低音補強のためのシンプルな音型であれば、初心者も比較的容易に演奏することが可能である。

6. 合奏練習のプロセス

当該授業においては、選曲や楽器選択の段階から学生同士のディスカッションの機会を積極的に設けている。音楽を仕上げてゆくという共通の目標をもって協働作業を進めてゆくことにより、チームワークを大切としながらアンサンブルを作ってゆくことを目指しているからである。

最初の段階での基礎練習として過去の年度においては、**譜例 1** のような基礎練習課題も実施した。この例では、スネアドラム+バスドラムの組み合わせのほか、いろいろな打楽器を組み合わせるリズム練習を行う。上下のパート 1 人ずつを基本とするが、一人で演奏することも可能である。同時に多人数で演奏しながら、強弱やリズムパターンを徐々に変化させてゆくことも可能である。指揮者を決めてそれらを指示するなど、応用が可能である。また、様々な楽曲を歌いながら、合わせて演奏することもできる。そのような練習を組み合わせながら、全員での合奏を仕上げてゆく。このようにしながら、様々な楽器の基本的な奏法を身につけてゆくようにした。



譜例 1：打楽器基礎練習の課題例

実際の合奏練習にあたっては、各自の割り当てられた楽器の個人練習やパート練習から始め、その後「合わせ」の練習に入った。指揮も通常は学生が担当するので指揮法についても基本的事項をあらかじめ全員に説明し、簡単な練習もしておいた。

これらのプロセスを経て実際に合奏が仕上がった時は、学生たちが大きな達成感を共有することができた。

7. 合奏楽譜編曲法の指導

「音楽理論」の授業では伴奏づけの指導を行ったが、**譜例 2** のような伴奏づけ課題から **譜例 3** のような合奏楽譜を作成する編曲方法についての学生への説明は十分とは言えなかった。

伴奏づけの手順としては、まず、**譜例 2** の下段の「和音進行の骨子」の部分の与えられたベースラインに基づいて和音進行を考え、その後「和音進行の骨子」に基づき左手伴奏を各自で作成し大譜表部分に記入する。これらの作業は、編曲の基礎的技能育成につながると考える。

一方、本稿執筆年度における 2 年生の開講科目である「作曲法基礎」では、より自由に学生が課題を選択し、グループ作業で編曲などの応用的な作業も行っている。実際に「幼児音楽プログラム」の発表会で演奏する楽曲の打楽器パート加筆やピアノパート編曲なども行っている。

*「和音の骨子」を参考に、各自で左手伴奏を作成し、記入する。

和音の骨子
(和音進行の例) *与えられたベースラインの上に和音を記入する。

I IV V₇ I V₇ I

譜例 2：伴奏づけ課題例「ピクニック」

ピクニック

♩=112 ca. メロディーライン

A

Fl. *f* メロディーライン

鍵盤
ハーモニカ1 *f* メロディーライン

鍵盤
ハーモニカ2 *f* メロディーライン

A.Sax *f* メロディーライン

Euph. *f* おもにピアノの左手（ベースライン）を強調

木琴 *f* メロディーライン

グロッケン
鉄琴 *f* ピアノ右手上下の音（リズムは別）

キーボード *f* ピアノと同じ音階（持続感のある音色を使用する）

Snare Drum *f* おもにピアノの右手のリズム

Bass Drum *f* おもにピアノの左手（ベースライン）を強調

Sus.Cymb. *f* おもにピアノの右手のリズム

カスタネット
タンブリン *f* おもにピアノの左手（ベースライン）を強調

ピアノ *f*

対旋律（※カウンターライン）：ピアノ右手下の音（リズムは別）

メロディーラインとおもに3度や6度などの協和音程の関係で相対する（補完的な動きをする）

譜例3：「ピクニック」合奏譜（スコア）の冒頭部分（筆者編曲）

「くるみ割り人形」より
行進曲

♩ = 120 ca.

鍵盤ハーモニカ1
アコーディオン1

鍵盤ハーモニカ2
アコーディオン2

Xylophone 1

Xylophone 2

Piano

Electric Piano

Bass Drum

7

[A]

鍵盤ハーモニカ1
アコーディオン1

鍵盤ハーモニカ2
アコーディオン2

Xyl. 1

Xyl. 2

Pno.

E. Pno.

B.D.

譜例4:「くるみ割り人形」より「行進曲」合奏譜(スコア)の冒頭部分(筆者編曲)

譜例 3、及び譜例 4 は、筆者が作成・編曲した合奏楽譜（スコア）の冒頭部分である。譜例 4 は、本稿執筆年度の 1 年生の授業「アンサンブル（合奏・合唱）」において使用しているもので、幼児教育現場で一般的に用いられている楽器のみによる編成とした。この楽曲は、本年度 12 月に開催される「幼児音楽プログラム発表会」でも演奏する予定である。現在、受講生 35 名で練習しているが、鍵盤ハーモニカで重音を用いるなどの工夫で厚みのある響きを目指している。

8. 学生の自己評価

表 3 は 2019 年度の「幼児音楽ⅡA」の授業初日に学生に配布した自己評価のためのルーブリックである。この授業は合奏に限定した内容ではないので合奏以外の評価項目を含んでいるが、音楽という可視化して評価することの難しい内容を扱う授業において学生自身が積極的に目標を理解しながら活動できるように配慮して作成し、配布したものである。

本授業で音楽を取り扱うことの目的は、技術的な面の向上だけではなく、音楽をアンサンブルとして作り上げていくという協働作業の過程を通してチームワークの大切さを知り、豊かな音楽観を持ち、ひいては幼児教育に音楽を生かすことのできる創造性をもつ保育者

表 3：「幼児音楽ⅡA」における学生の自己評価のためのルーブリック（2019 年度）

自己評価（最終回）					
15回の授業を振り返って項目ごとに自己評価してください。					
	5	4	3	2	1
企画・準備 ・台本 ・道具・衣装製作 ・広報	・客観的理由も踏まえて積極的に企画に参加できる。 ・様々な準備作業に積極的に参加した。	・自分なりの意見をあげて企画に参加できる。 ・様々な準備作業に参加した。	・企画に参加できる。 ・準備作業に参加した。	・企画がすることが難しい。 ・準備作業への参加が不十分だった。	
	5	4	3	2	1
コミュニケーション	・人間関係が円滑に進むよう、適切にコミュニケーションをとることができた。	・適切にコミュニケーションをとることができた。	・適切にコミュニケーションをとることができるよう自分なりに努力した。	・適切にコミュニケーションをとることが難しかった。	
	5	4	3	2	1
演奏 ・準備練習	・準備練習ができていて、正しく演奏することができる。 ・聴き合いながらアンサンブルをまとめることができる。	・準備練習ができていて、演奏することができる。 ・アンサンブルをまとめることができる。	・準備練習を自分なりに努力した。 ・アンサンブルをまとめることができる。	・準備練習があまりできていなかった。 ・アンサンブルをまとめることが難しかった。	
	5	4	3	2	1
演技 ・準備練習	・準備練習が十分できていて、効果的な演技ができる。 ・台詞の発声や、身動きも効果的である。	・準備練習ができていて、演技ができる。 ・台詞の発声や、身動きも工夫した。	・準備練習ができていて、何とか演技ができる。 ・台詞の発声や、身動きもできた。	・準備練習があまりできていなかった。 ・台詞の発声や、身動きもあまりできていなかった。	
	5	4	3	2	1
保育での応用	・子どもに円滑に音楽を教えることができる。 ・音楽を生かした保育ができそのための企画力もある。	・子どもに音楽を教えることができる。 ・音楽を生かした保育ができる。	・保育現場に入ったとき、音楽活動が応用できる。	・保育現場での音楽活動への応用は難しい。	

となることを目指すことである。

なお当該授業においては、表 3 に示すルーブリックに加え別表を添付し、毎時間の活動内容と感想などを学生に記入させるようにしている。

9. 今後に向けて

現在、本学において合奏を体験できるのは、当該授業履修者のみである。

今後予定されているカリキュラム改定により、「幼児と表現 1（音楽）」などの授業科目が新たに加わることとなっており、合奏に関する内容についても今後の授業において多くの学生が少しでも経験できるように工夫してゆきたいと考えている。

注

1. 「幼児音楽（系）プログラム」は本学幼児教育学科において 2013 年度入学生より実施されている本学独自の履修方式で、一連の音楽専門科目を余分に履修するプログラムである。発足当初は「幼児音楽系プログラム」の名称であったが、2017 年度より「幼児音楽プログラム」の名称に変更された。
2. 本稿執筆時点で“finale 25.5.0.259”を使用している。

参考文献

1. 山岸 徹、川畑尚子、迫田リツコ「大阪キリスト教短期大学における『幼児音楽系プログラム』について -発足からの歩みと今後の展望-」、『大阪キリスト教短期大学紀要』第 56 集 2016 年、136-150 頁
2. 山岸 徹、増田佳子「本学幼児教育学科における歌の指導についての検討 -『表現』の内容の一環として-」、『大阪キリスト教短期大学紀要』第 57 集 2017 年、133-145 頁
3. 山岸 徹「音楽表現力を引き出す伴奏付け指導メソッドの構築 -授業実践を振り返って-」、『大阪キリスト教短期大学紀要』第 58 集 2018 年、78-87 頁